

令和 5 年 6 月 13 日現在

機関番号：34448

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K12442

研究課題名（和文）認知症カフェ・ボランティア養成のための学習コミュニティの構築

研究課題名（英文）Establishing a learning community for dementia cafe' volunteer activities

研究代表者

寺田 美和子（TERADA, Miwako）

森ノ宮医療大学・看護学部・准教授

研究者番号：20433237

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では認知症カフェボランティア活動支援と受講脱落防止の学習コミュニティを持つeラーニングを開発した。国内外の認知症カフェの実態調査と視察を行い、認知症カフェにより目的やボランティアに期待する役割の違いがあることを明らかにした。そこでeラーニング教材は多くの認知症カフェボランティアが活用できる基本的な内容で作成した。また進歩していく認知症ケアに合わせ速やかなアップデートをおこなった。試行調査の結果、eラーニングの操作性、教材に若干の修正を要するが、認知症カフェ、認知症の人への理解に有用であることが確認できた。同時に認知症カフェボランティアコンピテンシー（卓越した行動特性）を同定した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

認知症カフェボランティアの養成は認知症カフェの運営の課題の一つである。時、場所を選ばず、また進歩する認知症ケアに合わせアップデートが容易なeラーニングが認知症カフェボランティア養成に活用できる示唆を得たことは、今後認知症の人が増えていくと予測される我が国において社会的意義が大きいと言える。

また、認知症カフェにより目的やボランティアに期待する役割が異なる中で、認知症カフェボランティアコンピテンシーを同定したことは、認知症カフェボランティア養成の原則として多くの認知症カフェで活用されることが期待できる。

研究成果の概要（英文）：In this study, we developed an e-learning community that supports dementia cafe volunteer activities and prevents dropouts. We conducted a fact-finding survey and inspection of dementia cafes in Japan and overseas, and clarified that there are differences in the purpose and role expected of volunteers depending on the dementia cafe. Therefore, we created e-learning materials with basic content that can be used by many dementia cafe volunteers. In addition, we made a quick update in accordance with the advancing dementia care. As a result of the trial survey, it was confirmed that although the operability of e-learning and the teaching materials require some modifications, it is useful for understanding dementia cafes and people with dementia. At the same time, dementia cafe volunteer competencies (outstanding behavioral traits) were identified.

研究分野：老年看護

キーワード：認知症カフェ 認知症カフェボランティア コンピテンシー eラーニング

## 1. 研究開始当初の背景

超高齢社会を迎えたわが国では、団塊の世代が75歳以上になる2025年には認知症高齢者の数は470万人、65歳以上の高齢者の約5人に1になると予測されている(厚生労働統計協会,2015;厚生労働省老健局,2016)。厚生労働省が策定した2012年「今後の認知症施策の方向性について」および2015年の「認知症施策推進総合戦略(新オレンジプラン)」のなかで「認知症カフェ」が取り上げられ、認知症の人とその介護者が認知症と共に生きていくことができる社会を目指す施策の中心においている。(厚生労働省;2012,厚生労働省;2015.) 認知症カフェの数は2012年には28ヶ所程度であったが(家族会;2013)、その後急速に増加し、2014年には41都道府県で655ヶ所(厚生労働省老健局,2016)、2016年では1,000ヶ所と急激に増加している(武地;2016)。

認知症カフェの運営は保健・医療・福祉・介護の専門家や自治体関係者、ボランティアが担っている。しかし、実際は専門家や自治体関係者はそれぞれ本務があり認知症カフェに割ける時間の確保は十分とは言えず、認知症カフェ運営の成否はボランティアによるところが大きい。(家族会,2013; Susan H,2014; 武地,2015;木宮,2016 村山,2016)。ボランティアは専門職の代わりとしての存在よりも、認知症の人やその家族が住む地域を熟知しており、生活者として共に存在する点に意義がある。

数のうえでは順調に増加している認知症カフェであるが課題もあり、その一つが「運営に携わる人材の確保と養成」である。認知症カフェボランティア養成のための講習の多くは集合型の講義形式で行われることが多い。この方式は時間、場所の制約があり、加えて移動の時間や交通費の負担があり、受講者・講師双方にとって利便性に限界がある。今回、我々が開発を目指す認知症カフェのボランティア養成のためのeラーニング教材は受講者・講師にとって場所や時間を選ばず、現状の課題を解決するものである。またeラーニング教材で起こりやすい受講者の脱落を防ぐため、同時にインターネットを介した学習コミュニティをつくり受講者間で学習の共有や交流、講師との交流をもち脱落を防ぐことを考慮している。将来はこの学習コミュニティがボランティアスタッフ同士のさらなる学び合いの場、認知症カフェでの活動における悩みを相談し、解決する場となることを想定している。

1.厚生労働省 認知症施策検討プロジェクトチーム:「認知症施策推進総合戦略～認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて～(新オレンジプラン),2015. 2.認知症の人と家族の会:認知症カフェのあり方と運営に関する調査研究事業 報告書,2013. 3.武地一他:認知症カフェに参加する市民ボランティアのスタッフとしての達成度評価,日本老年医学会雑誌,51 巻,96,2014.

## 2. 研究の目的

本研究は「認知症カフェ」で活動する認知症カフェボランティアの活動支援に必要な(1)認知症カフェにボランティアに必要なコンピテンシー(卓越した行動特性)の同定、(2)認知症カフェにおけるボランティア養成のためのeラーニング(学習コミュニティ含む)の開発を目的に実施した。

## 3. 研究の方法

(1) 認知症カフェでのボランティア活動の実態把握(2017年度～2018年度)

・文献レビュー

- ・国内認知症カフェへの質問紙調査による実態調査

- ・国内7ヵ所認知症カフェ視察

- ・オランダ認知症関連施設視察

(2) 認知症カフェボランティアコンピテンシー策定(2018年度~2022年度)

- ・認知症カフェでのボランティア活動の実態把握、文献レビュー、研究者間討議。

(3) eラーニング開発と試行調査(2020年度~2022年度)

- ・認知症カフェボランティアコンピテンシーをベースに教材・eラーニングシステムを開発、認知症カフェ運営者、認知症ケアに卓越した研究者等によるレビューののち、2回のeラーニング試行調査を実施した。

#### 4. 研究成果

(1) 認知症カフェでのボランティア活動の実態把握

認知症カフェボランティアに期待する役割は「特技を活かす」「会話やレクリエーションに参加者と楽しむ」「企画立案」であり、認知症カフェごとに実施されている研修内容も当事者や家族とのコミュニケーションが多かった。認知症カフェボランティアに「認知症カフェを企画、進行」を期待する認知症カフェと「ボランティアだからその人がしたいと思っていることだけ行ってもらおう」という意見があった。

オランダ認知症カフェ関連施設ではオランダアルツハイマー協会が作成している認知症カフェマニュアルに則りスタッフやボランティアの教育が行われていた。

(2) 認知症カフェボランティアコンピテンシー策定(2018年度~2022年度)

認知症カフェボランティア活動の実態把握、文献レビュー、研究者間討議をもとに「認知症カフェボランティアコンピテンシー(初回)」10項目(「自発性」「地域の中の認知症カフェ」「無償性」「継続性」「地域を知っている」「来店者、スタッフとの円滑な人間関係」「認知症カフェで当事者、家族、地域住民と会話できるための基礎知識」「自分の役割」「安定」「援助成果」「学習継続」)を同定した。その後、第2回試行調査と併行して研究者間で検討を重ね「認知症カフェボランティアコンピテンシー(第2回)」を3項目(「役割遂行力」「コミュニケーション力」「セルフコントロール力」)に改訂した。

(表1 認知症カフェボランティアコンピテンシー(第2回))

(3) eラーニング開発と試行調査

認知症カフェボランティアコンピテンシー(初回)10項目を同定後、eラーニングを開発した。教材は〔第1章 認知症カフェ〕〔第2章 認知症〕〔第3章 認知症の人と家族〕〔第4章 認知症カフェボランティアの活動〕〔第5章 支援者〕である。各章の最後にはその章で学習した知識を確認できるように確認クイズを設けた。また随時外部のHpや動画を見ることができるようリンクをおいた。(図1 eラーニング教材項目)

第1回試行調査を1名の対象者に実施した。eラーニング操作に大きなトラブルはなく、また教材の点からも「認知症カフェやボランティアが何をするのかイメージできた」と概ね良好な結果であった。指摘を受けた「順番がわかりづらい」「進捗や休憩をとるタイミングがわかりにくい」「認知症カフェの目的と目指していることの違いはなにか」「ケアマネジャーの役割がわかりにくい」については改良を試みた。

第2回試行調査は7名を対象者に実施した。教材の点では、受講前に誤答が多かった項目は認知症カフェが目指すこと、記憶の内容、認知症の人の気持ちであった。いずれも受講後は正答者が増えた。

「eラーニングの操作が難しい」「教材・クイズの説明がわかりづらい」「教材の量が多い」と回答した者がそれぞれ半数程度であった。eラーニングに慣れていないものは受講に不安があったため研究者がそばでサポートを行った。サポートを行うことでeラーニング教材について、また認知症の方や家族へのケアをディスカッションする機会となった。

以上のように我々が開発したeラーニングは操作性、教材の内容など改良すべき点はあるが、受講者が各自のペースで学習できること、認知症ケアの進歩に迅速に対応できること、受講者と教材提供者の相互作用が学習効果を高めることから認知症カフェボランティア活動支援に有意義であると考えられる。

表1 認知症カフェボランティアコンピテンシー(第2回)

領域	コンピテンシー	レベル4	レベル3	レベル2	レベル1
役割遂行力	役割の遂行	認知症カフェボランティアの役割を自ら考え施設職員や専門職と協力して活動することができる。	認知症カフェでの活動に認知症の人や家族の要望を取り入れることができる。	認知症カフェボランティアの役割を一部理解して活動している。	認知症カフェボランティアの役割を少しだけ理解して活動している。
	活動の改善	認知症カフェのボランティア活動でできたこと、できなかったことを基に今後どう活かすか説明できる。	認知症カフェのボランティア活動でできたこと、できなかったことを説明できる。	認知症カフェのボランティア活動でできたこと、できなかったことを一部説明できる。	認知症カフェのボランティア活動でできたこと、できなかったことを少しだけ説明できる。
	プライバシーへの配慮	認知症の人・家族のプライバシーに配慮していることをさとられず行動できる。	認知症の人や家族のプライバシーに配慮しながら会話できる。	ときどき認知症の人や家族のプライバシーに配慮した会話できる。	まれに認知症の人や家族の個人情報に配慮した会話ができる。
コミュニケーション力	対応の原則	認知症の人との対応の原則*1を踏まえたコミュニケーション例を他のボランティアに説明できる。	認知症の人との対応の原則を3つ以上説明できる。	認知症の人との対応の原則を2つ以上説明できる。	認知症の人との対応の原則を1つ以上説明できる。
	対等な態度	認知症の人や家族に対して対等な気持ちで自然に接することができる。	認知症の人や家族に対して「してあげる」という気持ちでなく対等な気持ちで接することができる。	認知症の人や家族に対して「してあげる」という気持ちがあるがときどき対等な気持ちで接する。	認知症の人や家族に対して「してあげる」という気持ちが強いが、まれに対等な気持ちで接する。
	地域との共生	職場や地域などで認知症の人や家族への理解を広めたり、安心できる場所になるよう努めている。	認知症の人や家族に理解のある人*2や安心できる場所*3を3つ以上あげることができる。	認知症の人や家族に理解のある人や安心できる場所を2つ以上あげることができる。	認知症の人や家族に理解のある人や安心できる場所を1つ以上あげることができる。
セルフコントロール力	ネガティブ情報からの自己防衛	対応が難しいと感じる来店者*4への対応を自分で抱え込まず対応することができる。	対応が難しいと感じる来店者への対応を自分でできる。	対応が難しいと感じる来店者への対応がわからずときどき困る。	対応が難しいと感じる来店者への対応に困ることが多い。
	ハラスメントへの自己防衛	暴力やセクシャルハラスメントがあればその場で止めてほしい意思を伝えて暴力やセクシャルハラスメントを止めることができる。	暴力やセクシャルハラスメントがあれば適切な人や場所に相談できる。	暴力やセクシャルハラスメントがあれば回避することができる(例として話題を変える、席を替わる)。	暴力やセクシャルハラスメントがあれば我慢してやり過ごしている。
	心身の管理	認知症カフェボランティア活動を重に感じることなく生活することができる。	認知症カフェボランティア活動を重荷に思っても自分なりの気分転換を実行できている。	認知症カフェボランティア活動を重荷に思っても自分なりの気分転換をときどき実行できている。	認知症カフェボランティア活動を重荷に思っても自分なりの気分転換をまれに実行できている。

\*1対応の原則：驚かせない、急がせない、否定しない、大勢で取り囲まない、後ろから声をかけない。

\*2理解のある人：認知症サポーターや民生委員など

\*3安心できる場所地域包括支援センターやオレンジステッカーの貼ってある店など

\*4来店者：認知症の人、家族、認知症の人の介護者、地域の人、見学者など認知症カフェに来られたすべての人

## e ラーニング教材

. 認知症カフェ ・ 認知症カフェの役割, [フォーラム: 調べた認知症カフェを紹介しよう] ・ 「オレンジ」の意味・ 認知症カフェのお客様 ・ 認知症カフェのプログラム・ 認知症カフェのスタッフ ・ [フォーラム: ボランティアをはじめようと思ったきっかけ] ・ 海外の認知症カフェ ・ [コラム: 認知症カフェの始まり] ・ [確認クイズ]

. 認知症 ・ 認知症とは ・ 中核症状 ・ 行動・ 心理症状(BPSD) ・ 認知症の種類とその特徴 ・ 認知症の経過 ・ [確認クイズ]

. 認知症の人と家族 ・ 認知症の人がだきやすい感情 ・ 家族が抱きやすい感情 ・ 空白の期間 ・ [確認クイズ]

. 認知症カフェボランティアの活動 ・ 認知症カフェのボランティア活動における原則 ・ 開店前の準備 ・ 開店 ・ 飲み物提供  
・ カフェタイム ・ 閉店片付け

. 支援者 ・ 地域の支援者 ・ ピアサポート

図 1 e ラーニング教材項目

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 寺田美和子・山崎尚美・宮崎誠・百瀬由美子・南部登志江・島岡昌代
2. 発表標題 ICTを活用した認知症カフェボランティア活動支援 -教材・eラーニング活用を検討する
3. 学会等名 日本認知症ケア学会 2023年度東北ブロック大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 寺田美和子・宮崎誠・山崎尚美・百瀬由美子・島岡昌代
2. 発表標題 ICTを活用した認知症カフェボランティア養成 第1回試行調査に基づく有効性の検討
3. 学会等名 第4回看護人間工学会学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 寺田美和子・山崎尚美・宮崎誠・百瀬由美子・島岡昌代
2. 発表標題 eラーニングによる認証カフェボランティア養成のためのコンピテンシー策定
3. 学会等名 第21回認知症ケア学会大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 寺田美和子、山崎尚美、百瀬由美子、島岡昌代、宮崎誠
2. 発表標題 eラーニングによる認知症カフェ・ボランティア教育の内容検討 認知症カフェ・ボランティア実態調査に基づく結果からー
3. 学会等名 第20回日本認知症ケア学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 寺田美和子 山崎尚美 島岡昌代 南部登志江 宮崎誠 百瀬由美子
2. 発表標題 認知症高齢者へのボランティア活動に関する 研究の動向
3. 学会等名 第18回認知症ケア学会大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	山崎 尚美 (平木尚美)  (YAMASAKI Naomi)  (10425093)	畿央大学・健康科学部・教授    (34605)	削除 2020年3月31日
研究分担者	百瀬 由美子  (MOMOSE Yumiko)  (20262735)	日本赤十字豊田看護大学・看護学部・教授    (33941)	
研究分担者	島岡 昌代  (SHIMAOKA Masayo)  (30757696)	畿央大学・健康科学部・助手    (34605)	削除 2020年3月31日
研究分担者	南部 登志江  (NANBU Toshie)  (40568391)	大阪青山大学・健康科学部・教授    (34443)	
研究分担者	宮崎 誠  (MIYAZAKI Makoto)  (60613065)	帝京大学・理工学部・助教    (32643)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	山崎（平木） 尚美  (YAMASAKI Naomi)  (10425093)	畿央大学・健康科学部・教授    (34605)	2020年4月1日 研究分担者から変更
研究協力者	島岡 昌代  (SHIMAOKA Masayo)  (30757696)	畿央大学・健康科学部・特任助教    (34605)	2020年4月1日 研究分担者から変更

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関